2025 年度　自己評価・学校・施設関係者評価報告書

2026 年 3 月 31 日
社会福祉法人 恵満生福祉会
からたちこどもえん

1. 本園の保育・教育目標

- 健康でバランスのとれた心と体の発達を促す。
- 保育者や保護者との安定したかかわりの中で、自分を愛し、人を愛し、神を愛する心を育てる。
- 自然に触れ、さまざまなものに出会いながら、好奇心を育み、発見する楽しさ、学ぶ楽しさ、創造する楽しさを知る。
- 友達とのかかわりの中で、充分に自己発揮しながら、自己統制力もバランスよく身に付けていく。
- 自分のやりたいことを見つけ、意欲を持ってとことん取り組む中で集中力を養い、やり遂げた満足感を充分に味わって自己肯定感を育んでいく。
- さまざまなことを実際に体験することで、生きた知識を身につけ、豊かな感性、豊かな表現力を育む。

＜理念＞

「子どもと共に生きる」
子どもたちが現在を最もよく生き、よりよい未来を作り出す力の基礎を培う場所として、また、子ども、おうちの方々、保育者、地域の方々、遠くにいても想いでつながっている方々、その誰もが一人の人間として、その主体性が尊重され、対話（コミュニケーション）を通してお互いを認め合いながら、それぞれが「自分らしく誇りを持って幸せに生きていく」ための力を育んでいく場所でありたい。

＜方針＞

「一人ひとりがかけがえのない存在」として、お互いの存在そのものを喜ぶことにより、誰もがすべての根底に必要な「安心感」を得られるようにする。また、その安心感をベースに「人は自ら育つ力を備えており、自ら成長したいと願っている」という信念に基づいて、その成長する力を信じ、必要な援助を行い、子ども、保育者、保護者、地域の方々、みんなが共に育ち合っていけるように、さまざまな対話・コミュニケーションを通して民主的に実践を深めていく。

2. 本年度重点的に取り組む目標・計画

	課 題	具体的な取り組み方法
①	保育環境の充実	保育環境でも主に園庭や保育室などにおける物的環境の充実を図り、 その効果を検討する。
②	保育者の関わりの充実	子どもの健やかな育ちにつながる 保育者の関わりの質の向上を図る。
③	子育て支援および保護者に対する「伝える」の充実	子育て支援における内容の検討と充実を図る。 ドキュメンテーションなどの「伝える」内容や頻度などの検討および充実を図る。

3. 評価項目の達成及び取り組み状況

○ 保育者等の自己評価およびその共有

・ 2026 年 2 月に 1 年を振り返っての保育者等の自己評価を Google フォームにて実施、また、年度末の園内研修にて職員全員で保育の振り返りを行った。

〇園の自己評価・学校・施設関係者評価

- 1 日のみの公開保育では日常の保育が見えにくくなる可能性があるため、年間通して保育関係者の園見学を公開保育とし、(園見学・公開保育参加状況は＜参考＞参照)感想及び意見を学校関係者評価のひとつとした。(別紙資料として添付)
- 利用者家族等満足度調査(保護者アンケート)は 2025 年 9 月実施の無記名のアンケート調査(インターネット利用)である。なお、回答数は 31 家庭中 24 家庭(回答率 77%)
- 2026 年 3 月 3 日の公開保育・園見学に東洋英和女学院大学の塩崎美穂先生に施設関係者評価を担当していただく。なお、塩崎先生には、岡花先生とともに毎月の園内研修にもオンラインで参加いただき、自己評価と学校・施設関係者評価の接続の検討にもご協力いただいた。
- なお、3 月 3 日の公開保育と研究会には、東京より社会福祉法人東香会理事長の齋藤紘良氏、同法人しぜんの国保育園園長の斎藤美和氏、同保育園保育士の高原 潤氏、大津あゆみ氏が参加。

4. 総合的な評価結果

- 保育者自己評価より(別紙資料)
- 利用者家族等満足度調査より(別紙資料)
- 園見学・公開保育参加者より(別紙資料)

＜東洋英和女学院大学 人間科学部 教授 塩崎美穂 氏より＞

からたちこどもえんでは、つねに保育にかかわる社会状況を考慮し、子ども、保護者、職員、地域の方々への配慮がなされており、非常に高い評価に値する認定こども園であることはまちがいありません。

とくに、それぞれの子どもの記録がラーニングストーリーとして蓄積されていることは特筆に値します。保育実践の評価とは、数値化することのできない保育における大切な部分を明らかにしていく取り組みです。園内研修で読み合う各ラーニングストーリーには、それぞれの保育者に独自の視点を明らかにし、子どもの可能性を広げていくものです。保育者同士で保育実践についてラーニングストーリーから確認する機会は、今後も意識的に続けられていくことでしょう。こうした意識の共有が、次に行う実践を狭い目標に閉じ込めず、みんなで共有するイメージの指標を生み出しています。

今年度も保育実践者や保育研究者とともに、からたちこどもえんを訪問させていただきました。訪問者は例外なく、からたちこどもえんの保育者と環境が紡ぎだす「おだやかさ」に感動します。土地に根差したつながりのなか、子どもの能動性を刺激する園庭環境があることは他をもって代えがたい保育資源、社会文化的リソースでしょう。

これまでの日本の保育実践では、標準的発達基準に即した年齢別のカリキュラムが開発され、効率的に生産性や順応性などの有能さを「評価」する近代学校の普及が、現在の公教育の量的拡大を実現してきました。公教育の歴史的経緯は今のカリキュラム作成にも影響を与えており、限られた予算内で実践可能かどうかが問われる構造はかわっていません。基本的に一人の保育者や教師が多数の子どもに対応できるカリキュラムが求められ、そこでは、子どもたちが静かに保育者や教師のいうことを聞く構えが能力獲得の条件であり、子ども自身がそこにあるつながりのなかで表現していることが評価の対象になることはあまりありません。こうした歴史的経緯をへて、標準化や効率化のテクノロジーが徹底すればするほど、子どもの表現が保育者の予測を超える行為を「逸脱」とみなす評価になる傾向がつくられてきました。

こうした現状に対し、からたちこどもえんの保育実践では、子ども一人一人の行為が尊重され、それぞれの子どもが一人の市民として充実した毎日を送ることができるよう、丁寧な配慮がなされています。基準にしばられるのではなく、目の前の子どもから出発する保育を今後も続けていかれることを期待しています。